

## 平成元年の進学振分け

### —ある理系学生を選択—

青木 優 (進学情報センター)

4月から進学情報センターの専任教員という職に就いていろいろな業務に携わった。進学選択シンポジウムを開催し、各学部の講師の方々のお話を拝聴したり、学生諸君の進学選択について相談にのるなど、いわば受動的に人の話を「ふむふむ」と聞いてきたわけである。勿論、面談の時は自分や知人の身の上話を交えて対処するわけだが、今まで自分の大学生活について綴ったことがなかったことにハタと気がついた。そこで、自分が全面的に構成する最初の進学情報センターニュースくらいは当時の自身のことを曝け出そうと決意した次第である。もう四半世紀以上昔のことであるが、意外と記憶しているものだ。

僕(「私」とするところだが、普段から「僕」と言っていたのでまあよしとしよう)は昭和63年、東京大学理科一類に入学した。有名進学校出身者でない僕には、東大に高校の先輩や同輩があまり(というかほとんど)いなかった。とはいってもあまり人見知り性格でもなく、皆さんご存知の通り、入学するとすぐに行われるクラスのオリエンテーションで少なからず友達ができ、「どんなサークルに入ろうか」などと新しくできた友達とワイワイガヤガヤ、心が浮き立つような気がしていたと思う。結局、高校の部活でやっていた山登りをつづけようとインカレのサークルに入った。(そのサークルは山登り以外の行事があまりにも多かったので結局やめてしまった)

クラスの友達や講義はとても刺激的であった。入学直後はやはり入学試験のことが話題に上ることもあったわけだが、共通一次試験(今でいうセンター試験)の点数で一人どうも次元の違う話をしてきた。よくよく聞いてみると、彼はその年の全国一番だったというではないか!まさに「ナニソレー!」であ

る。数学の授業ではショックを受けた。解析学の第一回目の授業、つかつかと先生が教壇にやってきて、前振りもなく黒板に『0』と『1』を書き、「これは定義です」とおっしゃる。「ん? テイギ?」と考える間もなく超高速で字を書き連ねていくとともに機関銃のように言葉を発していくのである。「・・・これは定義です。・・・これは定理です。・・・」前の席に陣取っている同級生は、板書をこれまた超高速で書き移しながら「ふむふむ」といった様子。「僕が数学で身を立てることはありえない」と悟った瞬間だった。語学(外国語)はもともと不得意だったが、第二外国語のドイツ語はともかく、英語は6年間勉強してきたことだし何とかなるだろうと思っていた。しかしながら二つある講義の内、一つは読む本の内容自体が難解で(確か宗教関係の話だったと記憶している)、日本語訳のシケプリを見ても何が書いてあるか理解できない。結局、一年時の語学成績はカフカ全集<sup>1</sup>であった。化学の講義も衝撃を受けた。一年の夏学期から『量子化学』(今は『構造化学』という科目名称になっている)という必修科目があった。これは理系の皆さんはご存知だと思うが高校物理をきちんと理解していないと太刀打ちできない代物である。「これは化学じゃないだろう」とつぶやいたのは僕一人だけではないと思う。ここで僕は運命的な出会いをするわけだが、これはまたいつか話そう。

授業はかなり真面目?に出ていたと思う。ただ授業に出ることで、他の優秀な東大生と同等の学力を身につけることができるかというとなんかそうではない。そう、凡人には『復習』が非常に重要なのだ。当時は土曜日にも必修の授業があったが、半ドン(午前中で授業が終わること)なので午後はサークルがある人以外は暇である。すると4人集まって「核融合!<sup>2</sup>」などと叫びながら雀荘に潜り込むということがあった。これが月から金の空いているコマにも適用されれば、ただでさえアルバイトで時間が削られているのに復習する時間はない!(威張って言うな)「人と比べて秀でていたのは何だった?」と考え

<sup>1</sup> カフカ全集; フランツ・カフカは『変身』で有名な作家だが、ここでは成績が全部可(か)と不可(ふか)で揃っていることを例えて言う。別名 CD プレイヤー。

<sup>2</sup> 核融合! ; 軽い原子核同士が融合して重い原子核になることを指す

が、僕たちは二つの重水素(要は二人組)がヘリウム(四人組)になって麻雀ができる体制になる意味で使っていた。実際にはこの反応はない。

てみたら一つだけあった。学生実験の終了時間、これは抜群に早かった。『綿密な』予習のもと、パートナーとチームワーク良く、効率よく実験を行い、(良い意味で) 適当に解析し、如才なく試問に対応する。ただ、点数は終了時間の早さで評価されるわけではないし、ほとんどの人は『優』なので差は生じない。ぶちまけて言うが、僕の成績は悪かった。記憶に間違いがなければ、平均点は60点台だった。(60点台の何処にいたかはご想像にお任せする) 今の評点と比較できないが、お世辞にも良い点数とは言えない。

さて進学振分けである。(昨年度まで、『進学選択』というイベントは『進学振分け』という名称だった) 昭和から平成に変わって初めての進振、当時理科一類に入学した人はその多くが工学部か理学部に進学していた。(『ほとんどの人が』と書くと全学部を書くことになってしまうのは今も昔も同じである) 僕は入学以前から理学部指向であった。何となくではあるが大学院まで行って基礎的な『研究』をしたいと思っていた。大学院を出た後は、基礎研究ができる会社か国の研究所か、はたまた大学に残れば良いな、なんて呑気に事を考えていた。身の程知らずである。分野はどちらかという物理系が良いかなと漠然と指向してはいた。しかしながら、大学に入ると高校時代までの『理科』の科目と『自然科学』の区分けとは随分と違いがあることに気付きたし、研究分野によっては、物理、化学、生物、地学などと単純に括ることのできない学術分野が存在することも知るようになった。てことは理学部だと物理、天文、地球物理の各学科<sup>3</sup>なのかな? あー、化学もありだな、でも僕の点数ではこれらに志望出してもまず通らない! さて、どうする?

そこで候補として出てきたのが教養学部である。理系の学科として基礎科学科第一と第二がある。高校時代から存在は知っていて、なんかラジオ体操みたいな学科だなー、なんて不謹慎な感想を持っていた。名前が『基礎科学科』なのでベーシックなサイエンスをやる学科なのは解る。(何を間の抜けたこ

とを言っているのだろう、カタカナ英語にただけではないか!) 調べてみると基礎科学科第一は数学、物理、化学、生物、何でもやれ(やらされ)る<sup>4</sup>らしい。ん? 各学科の解説本には何やらアヤシゲなことが書いてあるぞ、アウトローの集まり、学科出身者の有名人は『美味しんぼ』で有名な雁屋哲、要は個性的な集団ってことだな、面白そうだ。ん? 点数的には余裕で入れそうだ、よいかももしれない、いやここしかない。工学部や農学部でも進学できる学科はあったと思うが、一度思いこんだら俯瞰で考えることができなくなっていた。僕の時代には第一段階、第二段階といった内定方式はなかった。一発勝負、第三希望まで書いてそれで漏れたら再志望に回る。遊びで第一志望は理学部の学科を書いてもよかったのかもしれないが、「もうここでいっか」という心境になってしまったのだろう。その帰結として、第一志望『教養学部基礎科学科第一』と相成った。ちなみに第二志望以降、これが全く記憶にない。その結果、見事希望進学先に内定、これが僕のそれ以降の将来を(おそらく)左右した進学振分けの顛末である。

後期課程や大学院に進学後もいろいろあったし、前述の『運命的な出会い』についても書きたいけれど、スペースも少なくなってきたので続きはまた今度ということにしよう……。ここで皆さんに認識していただきたいことがある。僕の話に続きがあるように、進学選択の後も続きがあるのだ。だって皆さん、大学に入学してそれで『おしまい』ではなかったではないか! これから人生、『先』はまだまだある。第一希望の進学選択先に行くことができた人にも、少々不満のある進学選択先に内定した人にも、次々と様々なイベントがやって来る。それぞれの場面で、皆さんはまた『選択(決断)』するわけなのだ。『進学選択』だけではなく、その他諸々のイベントにおける『選択(決断)』の積み重ねで、皆さんのこれからの人生が形つくられていくということをわかって(『覚悟して』とは決して言わない) おいて欲しい。

ということで、僕の今回の話はこれで『おしまい』。

<sup>3</sup> 聞きなれない学科があり戸惑うかもしれないが、理学部はまだましな方である。工学部なんて今では片鱗すら感じられない学科が存在した。

<sup>4</sup> 後身の『統合自然科学科』は4つのコースに分かれていて、何でもやれるがやらされることはなくなっている。念のため。